

## 演題「デジタルデンチャー製作と従来法（アナログ）との比較」

（有）セイブ歯研 廣末将士

私は歯科技工士として働き始めてからクラウン・ブリッジをメインに仕事をこなしてきた。今でも仕事のメインはクラウンブリッジである。そんな私がデンチャー製作をはじめたのは、今から 10 数年前のことになる。補綴物を製作していく上では、単冠や少数歯欠損のケースばかりではなく、多数歯や全顎的治療また咬合再構成（フルマウスリコンストラクション）を伴うケースを製作することも当然出てくる。単冠や少数歯欠損のケースであれば、反体側同名歯や隣在歯、対合歯など参考にできる対象が多く存在するが、多数歯欠損や全顎的治療となると参考にできる対象が少なくなり、顔貌や平面、その他解剖学的な指標を頼りに補綴物を製作することとなるため、それらを製作する上で、デンチャーの考え方が有効であると考え、専門学校を卒業して以来ほとんど携わることのなかったデンチャーを学びたいと受講した BPS テクニカル認定セミナー（佐藤幸司先生）がきっかけである。その後、排列セミナーや、佐藤幸司先生が主催されている PGA コースを受講し、デンチャーへの知識を深めてきた。それら知識は日々の仕事において、クラウンブリッジ製作にも通じる部分も多く、年々デジタルを活用するケースの増えている状況の中で、特にデジタルデザインで補綴設計を行う場合、ライブラリから読み出したクラウン形態を欠損部位に当て込んでいく作業となるため、欠損部位が大きくなるにつれ、排列ポジションや咬合、ガイドな

ど、デンチャーの要素が強くなると感じており、デンチャーについて学んだことが活きてきていると感じている。最近では私の仕事におけるデジタルの割合は8割を超えており、クラウンブリッジのイメージが強かったデジタルも、ここ数年でやっとデンチャーにも応用されてきた。デンチャーに関してはまだまだアナログのイメージが強いように感じるが、私自身も Programill PM7 (ivoclar) の導入をきっかけにデジタルデンチャー製作に積極的に取り組んでいる。そこで今回は、私が現在取り組んでいるデジタル技工の中でもデジタルデンチャーを中心に、その製作方法やチェアサイドとラボサイド仕事の流れ、コストや製作時間、材料の強度など従来法と比較しながら詳しく解説したいと思う。

◇略歴

2007年 福岡医科歯科技術専門学校（現：博多メディカル）卒業

2008年 大阪セラミックトレーニングセンター 宮崎校 卒業

2009年 （有）セイブ歯研 勤務

2013年 ivoclar vivadent C&B インストラクター 就任

2018年 大阪セラミックトレーニングセンター 宮崎校 同窓会会長 就任

2021年 （有）セイブ歯研 父より事業承継し代表取締役社長となる

◇所属

日本歯科技工学会

日本口腔インプラント学会

日本顎咬合学会

日本歯科技工士会

福岡技工研究会

STEP

WGG